

# 京都市地域・多文化交流 ネットワークサロン通信

発行日 2018年10月1日 編集・発行 京都市地域・多文化交流ネットワークサロン 第27号

## 生まれ変わる倉庫～新しい小劇場の名前

今年には本当に台風の当たり年でした。雨も相当降りましたが、何より怖かったのは凄まじい強風。自宅から見える鴨川沿いの並木がまるでスローモーションのように大きく揺れる様子に、まさに人の力が到底及ばない、自然の力の大きさを文字通り目の当たりにした気がしました。これをお読みなっている皆さんの中にも少なからず被害を受けられた方がいらっしゃるかと思います。心よりお悔やみ申し上げます。

さて、その台風の最中、私がとても心配していたのは東九条にある「八清倉庫」のことでした。既にご存知の方もたくさんいらっしゃると思いますが、現在、地元の皆さんのご協力をいただきながら来年夏の開館を目指している新しい小劇場「シアターイーナインキョウトTheatre E9 Kyoto」の礎となる建物です。

東九条の鴨川沿いにあるこの倉庫は、鉄骨2階建てでとても頑丈につくられているのですが、既に建てられてから半世紀近く経っており、「暴風に煽られて屋根や飛んでいないか、壁が剥がれ落ちていないか…」と気が気ではありませんでした。幸い、アンテナが倒れたり、と樋が一部破損していた以外はほとんど被害はなく、台風が過ぎ去った後、「これしきりのこと、まだまだ！」と言わんばかりに元気な姿で立っている姿を見て、これから新しく劇場として生まれ変わるために、力を振り絞って耐えてくれたのだと思い、少し涙が出ました。

現在、このプロジェクトでは、昨年に引き続き、主にインターネット上で資金援助を募る「クラウドファンディング」の第二弾に取り組むなど、建設費用獲得のために仲間たちと奔走中です。ところが今回の台風の影響で屋根に使う建設資材の入荷の目処が立たず（やむを得ず高価な資材を使わなければなりません）、また東京オリンピックやホテル建設ラッシュ、さらには消費税増税を見込んだ資材の買い占めなども重なり、当初見積もりから大きく予算がオーバーしてしまっています。とは言え、そんな泣き言を言ってもいられず、なんとしても実現させねばなりません！大自然の力の大きさにはおかないませんが、このわずか100席ほどの小さな劇場は、多くの人の力が集まれば、必ず建てる事が出来ます。



その小劇場の名前「Theatre E9 Kyoto」は、東=EAST（イースト）の頭文字「E」と「九条」の「9」から付けさせていただきました。生まれる前から名前をつけられた赤ちゃんはここ東九条というお母さんのお腹の中で必死に頑張っています。どうか引き続き、みなさんのあたたかいご支援をいただきます様、よろしくお願いいたします！

（蔭山陽太 一般社団法人アーツシード京都 理事）

## 東九条こどもてづくり映画ワークショップ(8/6)と上映会(8/18)報告

### <東九条こどもてづくり映画ワークショップ・映画づくり編>

2018年8月6日、映画づくりの担い手となる子ども達が集まってくれました。東九条地域の学童（希望の家児童館・東和学童保育所・山王児童館）から、小学校1～6年生と学年も様々な総勢33名での、ご近所映画クラブ結成です。このメンバーでグループに分かれ、たった3時間で映画をつくることに！

つくり始める前にまずは、映画についての基本を知るレクチャーからスタート。映画は監督、俳優、カメラ、美術、



脚本、などの様々な役割の人が協力してつくられていること、タイトルやテロップについて、カメラのひみつなど、映画のしくみを知っていきます。

そして、チームに分かれて映画づくり。どんな映画にするか話し合いながら、あらすじ、細かいカット、せりふなどを決めていきます。

今回、各チームに2名ずつ、とりまとめ役として、劇作、演出、俳優といったプロの活動をされているお姉さんお兄さんに参加してもらいましたが、そんなプロ顔負けのおもしろいアイデアが、子ども達からたくさんでてきました。



「こんなセリフが言ってみよう！」など、セリフから物語を紡いでいたり、森の中や、暗い夜など、子ども達の日常生活ではなかなか行けない場所や時間を設定して、そこからイメージを膨らませていたり。撮影場所は、ネットワークサロン内です。過去に希望の家児童館で使用したというゾンビの衣装も登場。真っ黒なゾンビが3人・・・これが声をあげるとかなり怖そうです。

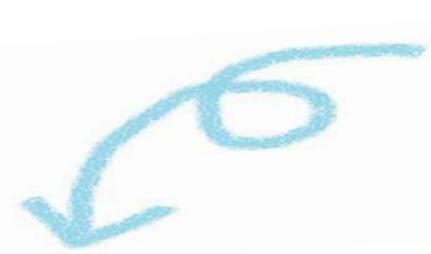
美術の工夫が見られるチームも随所に見受けられました。髪の毛の長い幽霊のような女性がテレビから出てくるシーンのためにテレビの枠を作ったチームは、テレビのノイズ画面を表現するために、白黒に塗った紙をくしゃくしゃさせて音を出したり、女性が出てくるときには部屋の電気をパチパチしたり。



そして、なんとか全チームが時間内に最後まで誰も脱落することなく撮影しきることができました。最後の全体集合では、「楽しかった?」という問いかけに、全員無反応でぐったり笑。これは、大人が映画づくりをした後と全く同じ状態です。



とにかく大勢で一つのものをつくりあげるのは大変。集中力と体力を使い切った様子の子ども達でした。



小道具作りも自分たちで!!



## 「ご近所映画クラブ」について

今回開催させていただいた、東九条子どもてづくり映画ワークショップは「ご近所映画クラブ」という名前のついたプログラム内容にて進行させていただきました。

「ご近所映画クラブ」は、フランスの著名な映像作家であるミシェル・ゴンドリーの著書「You'll Like This Film Because You're In It: The Be Kind Rewind Protocol」が基となっています。この著書は、ゴンドリー自身の展覧会において実施された映画づくりワークショップ（参加者がシナリオなどを考え、映画のさまざまなワンシーンを撮影できるようにセットが組まれている）のいわばマニュアルとなっており、展示に出向いた人々がその場で話し合い、映画の要素を決定して実際に撮影するまでの流れが記されています。

その内容を、大阪で映像表現を軸に活動を行うNPO remo[記録と表現とメディアのための組織]が翻訳し、ゴンドリーに了承を得て日本向けにカスタマイズしつつ2008年頃から実施しているワークショップが「ご近所映画クラブ」です。

NPO remo[記録と表現とメディアのための組織]は、メディアを通じて「知る」「表現する」「話し合う」、3つの視点で活動する非営利組織です。メディア・アートなどの表現活動や、地域における映像アーカイブの運動、文房具としての映像の普及、対話など、映像を囲む新しい場づくりなどを行っています。そういった趣旨から、NPO remoとしては、ミシェル・ゴンドリーの「誰もが短時間で映画をつくり楽しむためのメソッド」は、いつも「与えられるもの」として位置づけられるマスメディア発の映像ではない、D.I.Y.によるオルタナティブな映像の振る舞いを提示してくれるものとして、とても魅力的に映りました。

「ご近所映画クラブ」の基本形は、おおよそ5～7名程度を1グループとして、3時間で映画をつくるというプロセスです。グループは初めて出会った人々が組むことが多く、そのメンバーで対話しながら、映画のタイトルやジャンル、登場人物、あらすじ、セリフなどを皆で考え、ストーリーの順番に撮影してゆくという流れとなります。ストーリーの順番に撮影することで、鑑賞する際、記録されたシーンを順番に並べて観ることで物語が味わえるという仕組みです。あと「ご近所映画クラブ」のユニークな点は、グループの全員が役者になって映画に登場すること、そして撮り直し禁止（失敗してもそのままシーンを使用する）というルールです。このことにより、全員が関わった映画であるという証がつくられ、さらに、グループに通用する笑いや可笑しさが増すこととなります。いわば、マス（大勢に向けた）メディアに対して、小さなコミュニティで通用する手作りのメディアコンテンツが誕生する機会となるわけです。

「ご近所映画クラブ」は現在まで、美術館や公民館、そして「総合的な学習の時間」を活用して多くの小中学校で実施されています。正確な数は把握できていませんが、これまで200本を軽く超える作品がつくられてきました。そして、2014年にミシェル・ゴンドリーが来日した際、本人にもこのことを報告して大変喜ばれた次第です。

2018年の夏「希望の家」で低学年の子どもたちと「ご近所映画クラブ」を実施しましたが、2018年の冬には東京で高齢者に向けたワークショップを実施する予定となっています。映画づくりの面白さを実感するために、そして友達や近い人との協働の豊かさを味わうために、このプログラムが世代を超えて楽しんでもらえたら嬉しいです。



### <東九条子どもてづくり映画ワークショップ・上映会編>

2018年8月18日、映画づくりから数日後。子ども達がつくった映画は、東九条夏祭り会場にて上映され、特設スクリーンの前に、たくさんの方が集まってくれました。すごい……。

夏祭りということで、華やかに映画祭の授賞式のような演出・司会での上映会に。

それぞれ上映中は本気で怖がっている人、おもしろくて笑っている人、映っている自分が恥ずかしくて顔も耳も塞いでしまっている子ども達、いろんな人がそれぞれの楽しみ方で楽しんでくれていました。

1本上映が終わるたびに、作品をつくってくれた子ども達に前に出てもらい、つくった感想を聞きます。

「この作品をつくってみてどうでしたか？」

「楽しかった!」「工夫するのが楽しかった!」「みんなでキヤー!って言うのが楽しかった。」「難しかった。」「普段は怖くてホラーとか観れないけど、つくるのは怖くなかった!」

会場からの盛大な拍手をもらって、上映会及び「東九条子どもてづくり映画ワークショップ」終了です。

スタッフの帰り間際、希望の家児童館のみなさんから「館にとっても子ども達にとっても有意義な時間でした」とおっしゃっていただき、一同、感激しながら帰路についた次第です。ご参加いただいたみなさん、お手伝いくださったみなさん、本当にありがとうございました。

**久保田テツ（大阪音楽大学准教授/NPO remo【記録と表現とメディアのための組織】）**

**松岡咲子（大阪音楽大学助手/ドキドキぼーいず副代表・俳優）**



## <登録団体より活動紹介>

### はじめまして BRDG です ～「京都という町のローカルな国際性」

はじめまして BRDG（ビーアールディージー / ブリッジ）と申します。私たちは京都市内外で演劇を作ったり、演劇を使ったワークショップやアートプロジェクトを行っているグループです。

ネットワークサロンのことは、2016年の春まつりに行ったのをきっかけに知りました。様々な人が楽しそうに一緒に過ごしている様子を見てワクワクしたのを覚えています。

私たちは2012年から「京都という町のローカルな国際性」をテーマに演劇作品を作っています。多様なルーツを持つ人たちが多く住む京都で、人々がどんな暮らしを営んでいるかを知りたい、そして演劇を通じていろんな人が楽しんだり、交流するきっかけを作りたいと思い活動をしています。京都市以外では、京都府京丹波町の閉校になった小学校で「423（しつみ）アートプロジェクト」と題して、地域の人々へのインタビューをもとにした作品づくりや子ども向けのワークショップ、映画作りも行なっています。

ネットワークサロンを知り、学習支援、クリスマス会、東九条マダンなどの集まりやイベントに参加することでたくさんの方に会う機会ができ、地域のことを学びながら楽しい時間を過ごしています。

今年の3月には『Whole』という演劇作品を東九条にある studio seedbox という場所で上演しました。「日本以外に何らかのルーツを持つ人たち」にインタビューし、それを一人芝居にしたのですが、ネットワークサロンを通じて出会った方たちの一人一人の物語をお借りして作った、BRDGにとって大切な作品になりました。



今年の6月に BRDG はフィリピンに行き、PETA（フィリピン教育演劇協会 Philippine Educational Theater Association）という団体の活動を見たり、フィリピンの子どもたちとワークショップを行ってきました。10月にはネットワークサロンで『日々の暮らしのなかで、演劇と。』というシンポジウムと、ネットワークサロンがサポートをしている、外国にルーツのある子どもたちの学習会「たけのこ会」で PETA の俳優を招いて『わたしのブンカ』というテーマで演劇のワークショップをします。どんな演劇のワークショップになるか今からとても楽しみにしています。

来年秋にできるネットワークサロン近くの劇場で、私たちも作品の上演を予定しています。多様な人が関わり、作って、観て、楽しむことができる演劇を作っていけたらと考えています。（BRDG 山口恵子）

\*1… 2018年3月に上演された『Whole』撮影：Koichiro Kojima

\*2… フィリピンでのワークショップの様子

□ 所在地：〒601-8006 京都市南区東九条東岩本町 31（京都市地域・多文化交流ネットワークセンター内）

□ TEL：075-671-0108 □ FAX：075-691-7471 □ E-Mail：info@kyotonetworksalon.jp

□ 開館時間：9時～17時 □ WEB サイト：http://www.kyotonetworksalon.jp

□ JR 京都駅八条口・京阪東福寺駅・市営地下鉄九条駅より徒歩 15 分

京都市バス 42・202・207・208 系統 九条河原町より徒歩 10 分／84 系統 河原町東寺道より徒歩 1 分